

千代女の里俳句館周辺案内図



俳句館ご利用の際は、立体駐車場が3時間まで無料となっております。駐車券を受付までお持ち下さい。

松任ふるさと館と紫雲園



俳句館に隣接する松任ふるさと館は、明治・大正・昭和初期に金融業、倉庫業、米穀業で財をなした吉田茂平氏の旧宅で、昭和 57 年に市が譲り受け、「松任ふるさと館」として開館しました。

多数の名石が使われた庭園は公募により「紫雲園」と名付けられ、四季のいどりに満ちています。平成13年10月12日には母屋部分、門、門の両側の物置が国の登録有形文化財に指定されました。俳句館から庭園を経由すると「松任ふるさと館」「中川一政記念美術館」に近道です。

松任城址公園（旧おかりや公園）



松任城は、一向一揆の旗本、松任氏の居館として始まりました。天正11年(1583)前田利長の居城となり、幾多の変遷を経て江戸時代初期に廃城となりました。昭和34年10月松任城址保存会の手によって、江戸時代に作成された古絵

図をもとに、松任城の四域や大手先が比定され、公園内に本丸碑と市街地に5基の赤戸室石による石碑が建立されました。

俳人の加藤楸邨は大正 12 年から 2 年間、代用教員として松任小学校（現学習センター）に勤めており、この公園のけやきの根にすわり、あんころ餅を食することを楽しんでいました。

千代女居宅跡（ギャラリー千代堂）



明治の始めまで、庵室があったと伝えられますが、当時の風情は駐車場の奥にある「なつめの老木」が残るだけです。現在は、ギャラリー千代堂となっていて市内外の作家の作品を展示しています。

商店街の道が北陸街道にあたります。居宅跡の向かい側が千代女の母の実家と見られる松任町肝煎・村井屋のあった場所で当時は松任でも最もにぎやかな場所にあたります。ギャラリー千代堂入口の「千代尼居宅蹟」碑は千代女研究家の中本恕堂氏が昭和 34 年 11 月に建立したもので、朝顔の句が刻まれています。

松任城址公園の野本永久句碑

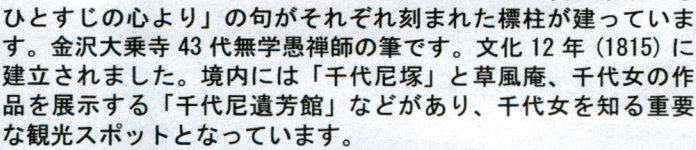


駅前交差点から松任城址公園に入ったところに、野本永久の句碑があります。

「泣きいさつ男神の如く
梅雨荒し」は、昭和22年
12月、俳句雑誌「ホトト
ギス」雑詠の巻頭を飾った
女史の代表句です。

永久女史は「私の爪先から髪の毛の先々まで荒梅雨のしぶきをうけて立っていた。身体中がどろどろとなって、自分も雨の棒になってしまいそうになりながら一つの想念が私の頭の中に展開されていた。」といきさつを記しています。昭和 52 年 4 月 10 日に建立除幕式が執り行なわれています。

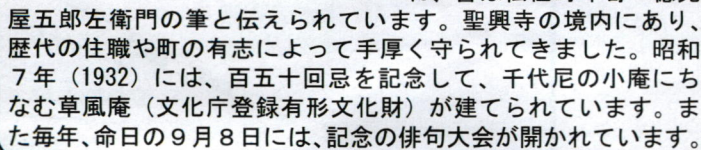
聖興寺



山門右手前の赤戸室石に「千代尼塚在此境内」側面に千代女の「百生りやつる

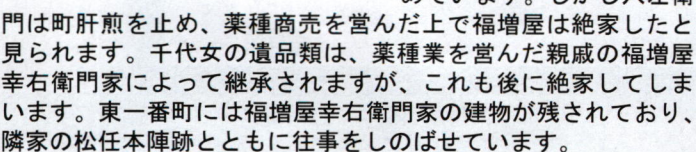
ひとすじの心より」の句がそれぞれ刻まれた標柱が建っています。金沢大乘寺 43 代無学愚禅師の筆です。文化 12 年 (1815) に建立されました。境内には「千代尼塚」と草風庵、千代女の作品を展示する「千代尼遺芳館」などがあり、千代女を知る重要な観光スポットとなっています。

千代尼塚



屋五郎左衛門の筆と伝えられています。聖興寺の境内にあり、歴代の住職や町の有志によって手厚く守られてきました。昭和7年(1932)には、百五十回忌を記念して、千代尼の小庵にちなむ草風庵(文化庁登録有形文化財)が建てられています。また毎年、命日の9月8日には、記念の俳句大会が開かれています。

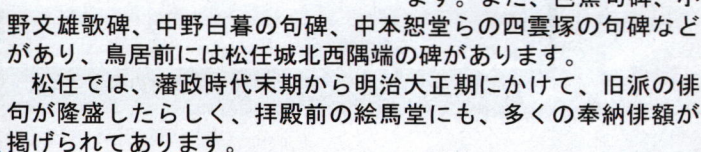
福増屋幸右衛門居宅跡



福増屋は、千代女の没後、養子六兵衛から孫の六左衛門と続きます。六兵衛は表具屋を止め、油吟味人や油肝煎など松任町の主要産業である絞油業の監督者を務め、六左衛門も油吟味人や松任町肝煎など町役人を勤めています。しかし、六左衛

門は町肝煎を止め、薬種商売を営んだ上で福増屋は絶家したと見られます。千代女の遺品類は、薬種業を営んだ親戚の福増屋幸右衛門家によって継承されていますが、これも後に絶家してしまいます。東一番町の福増屋幸右衛門家の建物が残されており、隣家の松任本陣跡とともに往事をしのばせています。

松任金剣宮



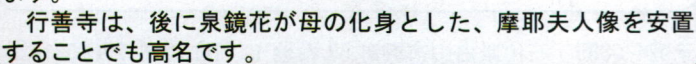
千代尼句碑「涼しさや梢
こずえの吹きあまり」は、
拝殿西側の小叢の中にあり
ます。また、芭蕉句碑、小

松任では、藩政時代末期から明治大正期にかけて、旧派の俳句が隆盛したらしく、拝殿前の絵馬堂にも、多くの奉納俳額が掲げられています。

ちょっと足を伸ばしてみませんか



行善寺



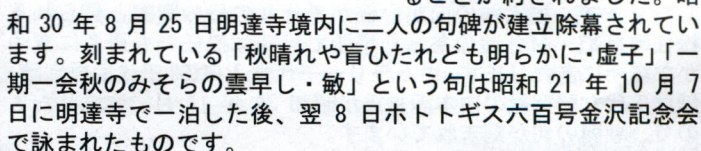
享保 11 年 (1726)、千代女は金沢の紫仙女 (俳人野角の妻、素心尼) と、ほととぎすの共作二吟の軸を作り、松任郊外的那留の行善寺 (現在白山市北安田町) に奉納しました。同寺に詣でた小松の兎路は、同地の須磨女らの句を付して、『姫

の式』として上梓しました。これは、女流俳人達の俳諧撰集として早初期のものです。

現在、門前には紫仙女の奉納経緯の文を記した石碑があり、また、美しい苔庭の中に千代女と紫仙女の句碑が建てられています。

行善寺は、後に泉鏡花が母の化身とした、摩耶夫人像を安置することでも高名です。

明達寺



北安田の傑僧、暁烏敏（非無）と高浜虚子との交際は、明治時代から始まりました。虚子は、大正2年から4度明達寺に敏を訪ねています。昭和28年10月7日に病中の敏を虚子が見舞った際、二人の句碑を建立することが約束されました。昭

和 30 年 8 月 25 日明達寺境内に二人の句碑が建立除幕されています。刻まれている「秋晴れや盲ひたれども明らかに・虚子」「一期一会秋のみそらの雲早し・敏」という句は昭和 21 年 10 月 7 日に明達寺で一泊した後、翌 8 日ホトトギス六百号金沢記念会で詠まれたものです。

市内のご案内にはボランティアガイド「松任うぐいすの会」が
ございます。 申込先 電話 076-274-9544 白山市観光文化部内